○「金魚ねぷた」の概要

江戸時代、金魚は一部の上流階級のみが飼育可能な高級魚であった。赤く、縁起がいい金魚を弘前ねぷたの運行時に暗闇を照らす灯籠として模したものが金魚ねぷたの始まりとも言われ、以後、約２００年に亘り、市民に親しまれてきた馴染み深い工芸品である。

近年では、ねぷた用品として存在する傍ら、様々なバリエーションの金魚ねぷたが製作され、県内外からの需要を高めている。

【主な製造工程】竹割→骨組→紙貼り→墨描き→ロウ描き→彩色→仕上げ

【主な製品】灯籠

○「津軽傳統組子」の概要

「組子」は、飛鳥時代から約１３００年以上続く、建築物の装飾として受け継がれている木工技術である。

「津軽傳統組子」は、組子の一種であり、木材を縦横互いに組み付ける「本捻組」という技法や、籠のような模様を表現する「目潰し本篭目」、三角形を複合し六角形の亀甲模様を織りなす「亀甲組子」といった多岐にわたる技法を用い、幾何学模様を構成することが特徴の工芸品である。

なお、「本捻組」「目潰し本籠目」は青森県内では「津軽傳統組子」でのみ使用されている技法であり、この二つを主として活用し、従来の平面な組子の作品から球体まで幅広く製作が出来ている。

【主な製造工程】切断→見込み→寸法の割出→見付仕上げ→切り出し→組立→表面仕上げ→完成

【主な製品】行燈・衝立・屏風・欄間・化粧組子

○「ずぐり独楽」の概要

温湯こけしの製作が始まる前より製作が始まったとされる木地玩具。製作工程には、鉋を使い削る、掘る、曲線を作るといったこけしを製作するために必要な基礎技術が全てつまっていると言われ、こけし工人の多くは修行時代、独楽製作を経て徐々にこけし製作に取りかかる。

昔から冬の遊び道具として黒石市含め周辺の地域の子供に親しみがある独楽で、黒石市を中心に冬のずぐり遊び文化が今現在も定着して残っている。

【主な製造工程】木地挽き→轆轤（ろくろ）線入れ→蝋引き→模様入れ→完成
【主な製品】かぶずぐり・さらずぐり・２段ずぐり

○「南部裂織」の概要

江戸時代に着古した着物や布を再生する機織りの一技法として生み出された織物である。当時は、寒冷な気候のために綿の栽培は難しく、北前船で運ばれた木綿や古手木綿はとても貴重な存在であった。そのため、厳しい生活を強いられた農村地方の女性たちが布を大切にするための知恵から生まれたものである。

細く裂いた布を横糸に、木綿糸を縦糸にして地機で織った裂織は丈夫で暖かく、そのカラフルな色移りと複雑な機上げが特徴である。

主としてこたつ掛けや帯などに用いられてきたが、現在ではテーブルカバーをはじめ現代感覚の手織物にも応用されている。

【主な製造工程】整経→筬（おさ）通し→男巻き（おまき）→綾越し→綜絃（そうこう）通し→元寄せ→機上げ→製織→完成
【主な製品】卓布・手提げ袋・こたつ掛け

○「津軽塗」の概要

およそ 300 年前の津軽藩四代藩主信政の時代に藩召し抱えの塗師池田源兵衛によって始められたと伝えられている。江戸時代には津軽藩の保護・育成の下、主に藩の調度品として用いられた。明治初期に産業として確立後は人々に親しまれる愛玩品として幅広く使われている。

津軽塗の代表格である唐塗はヒバの素地から塗り・研ぎ・磨きを繰り返し、４８もの長い工程を経て完成される堅牢優美な塗物である。唐塗だけではなく奈七々子塗・紋紗塗・錦塗の伝統的な４つの技法が現在まで受け継がれている。さらに現代風のアレンジを加えて多彩な紋様を生み出すことができる。昭和５０年に国の伝統工芸品として産業指定。平成２９年に重要無形文化財として技術指定され、津軽塗技術保存会が保持団体認定を受けた。

【主な製造工程】木地固め→布着せ→地付け→仕掛け→彩色→荒研ぎ→炭はぎ→摺塗→艶付→上塗→完成
→仕上げ→加工→完成
【主な製品】碗・重箱・テーブル・茶器・花器・盆・箸・飾棚

○「こぎん刺し」の概要

江戸時代、津軽の農民は木綿の衣料を着ることが許されていなかった。そのため麻地の着物を何枚も重ね着して寒さをしのいでいた。そこで農村の女性たちは保温と補強のために、麻の布地の要所要所に木綿で刺子を施した。こうして生み出されたこぎん刺しは、厳しい北国の自然の中で生きてきた女性の知恵の産物である。

こぎん刺しの特徴は、藍染の麻地に白い木綿糸で縦の織り目に対して奇数の目を数えて手刺しすることで、素朴で美しい幾何学模様が生み出されるところにある。また今日では用途によって木綿地やウール地なども用いられており、色彩も時代を経て多彩さを増している。

【主な製造工程】糸より→麻地染め→生地織り→生地を整える→裁断→刺し
→仕上げ→加工→完成

【主な製品】巾着・帯・バッグ・ネクタイ

令和３年度青森県伝統工芸士認定者

※市町村名は、伝統工芸士が所属する製造所の住所を記載してあります。

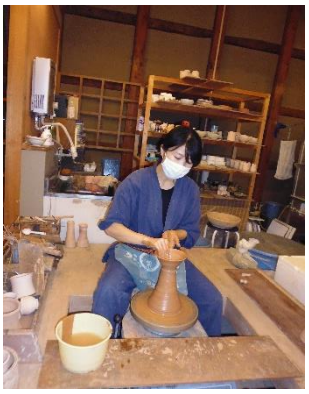
舘山 美沙氏《津軽びいどろ》　青森市

・平成９年４月に北洋硝子株式会社に入社して以来、結婚及び２度の出産を経て仕事と家庭の両立をしながら、津軽びいどろ商品製造の技術を学ぶ。従事年数は２３年。
・社内でも限られた人のみが習得している＜宙吹き＞という難度の高い技術を扱えるほか、技術的に舘山氏にしか製作出来ないヒット商品を数多く手掛ける。
・社内若手女性職人への指導も行っており、次世代女性職人の育成及び技術の継承に積極的である。

三好 千佳氏《南部裂織》　青森市

・平成２１年に南部裂織保存会に入会して伝統的な技法・技術を学び、平成２４年に同会師範科を修了。その後、平成２６年からさきおりCHICKAとして個人での創作活動を開始。従事年数は１２年。
・様々な織りの技法がある中で一番多用しているのは＜平織り＞であるが、＜つなぎ糸＞や＜刺し子＞も得意。
・アスパム２階 machicotoba に工房を持ち、体験教室を行うほか、国内外の展示会に出展するなど、南部裂織の普及啓発に貢献している。

坂本 羊子氏《津軽焼》　弘前市



・大学で陶芸を専攻し、平成１９年に津軽藩ねぷた村就職を機に津軽焼の製作を開始。従事年数は１３年。
・令和３年度青森県特産品コンクールにおいて、製作した＜青森のお米ナンバー碗＞が青森県物産振興協会会長賞を受賞。
・最も製作するのは＜ぐい呑み＞だが、＜茶碗＞や難易度の高い＜大皿＞も手掛ける。
・国内外の観光客、留学生、修学旅行生に津軽焼の魅力を伝え認知度向上に努めているほか、地元の幼稚園親子レクや小学校自主研修を通じて文化の継承も行う。

阿保 正文氏《温湯こけし》　黒石市

・平成１７年に青森県伝統工芸士：阿保六知秀氏に弟子入りして５年間修行後、津軽こけし工人会に入会。
従事年数は１６年。
・こけし、木地玩具のほか、製作道具等の製造も手掛ける。
・平成２２年に「みちのくこけしまつり」で秋田県知事賞を受賞して以来、「全国こけしまつり」も含め数々の賞を受賞。また、平成３１年には「東奥文化選奨」を受賞。
・観光客、修学旅行生等を対象にした絵付け体験指導や、若い方などをターゲットとした、創作こけしの製作に取り組むなど、普及啓発・後進育成及び販売層開拓にも努める。

佐藤 留美子氏《津軽組ひも》　五所川原市

・平成２１年に独学で学び、平成２２年から青森県伝統工芸士：川口良子氏に師事し、川口良子氏より津軽組紐工房の代表を継承。従事年数は１２年。
・様々な組台があるが、高台を使用しての組みが得意である。また、津軽のリンゴの木の皮・葉・花等で染めた糸を積極的に取り入れた、作品作りも行っている。
・県内の百貨店や観光施設に年に数回展示会を行うほか、民間のカルチャーセンターで講師を務め、普及啓発・後進育成にも努める。

齊藤 正美氏《津軽傳統組子》　弘前市

・昭和４１年に清藤建具製作所に入社し、傳統組子の技術などを習得。その後、平成１５年に独立し「建具工芸・齊藤」を開業。従事年数は５５年。
・建具師として文化財等の修復に携わるほか、他の本県伝統工芸品（こぎん刺し、津軽塗、南部裂織等）とのコラボ商品も手掛ける。
・平成２１年国際公募美術展・技能賞、平成２３年全国建具展示会・技術委員長賞、を受賞。そのほか、令和３年「現代の名工」として表彰されている。
・200 点以上の作品が並ぶ常設の展示場を開設するほか、弘前市内金融機関での展示、学校で組子の言い伝わりを若い世代等に伝えるなど、普及啓発・後進育成にも努める。

檜山 和大氏《金魚ねぷた》　　弘前市

・平成３年に津軽藩ねぷた村に就職し、金魚ねぷた製作に携わる。従事年数は３０年。
・伝統的な素材（竹・和紙）と技法を用いた、伝統的な金魚ねぷたの製作は勿論のこと、普及のため、敢えて、取り扱いしやすい素材（針金・とても丈夫な和紙）を用いた、現代風のユニークなデザインの作品も製作している。
・令和元年度、弘前マイスターとして認定。
・小学生の製作体験や、津軽藩ねぷた村の若手職人への指導など、後進育成等にも努める。